

# 2 漢方医学の歴史

## 中国篇

### 中国医学の発生と『黄帝内経』の成立

中国大陸に文明が発生した時点で、すでに原始的な医療行為が行われていたことは、出土した甲骨文などの古代文献や古代の説話を伝えた『淮南子』などの古文献に記されている。このような初歩的な医術は、文明の発展とともに次第にまとまりをみせ、一つの体系を形成するにいたった。これが中国医学の原形である。

その形成の過程については、この頃の書物にさまざまな形で見ることができる。医(醫)の字はもともと「醫」と書かれ、その文字通り医学は呪術的な要素が強かったが、次第に巫から分離し、純粹の医術として確立されていった。

司馬遷の『史記』には、春秋時代には扁鵲(図1)という名医が存在したことが、また秦から前漢にかけては、淳于意(倉公)という名医が活躍したことが書かれており、当時の医術の一端を窺うことができる。

すでに前漢から後漢時代にかけて、さまざまな医学知識が集積され、それらはある程度まとまった形をとっていたと思われる。現存する最古の医書『素問』の原形は、それらの知識を集大成したものであり、ほぼ同時代に『靈枢』の原形も同様の形をとって集大成された。この二書は、後世『黄帝内経』と呼ばれるようになり、改定・増補を経て、宋代に現在の形となった。ここには、主として陰陽五行説を主とした生理・病理論が述べられており、養生法や鍼灸を主とした治療法

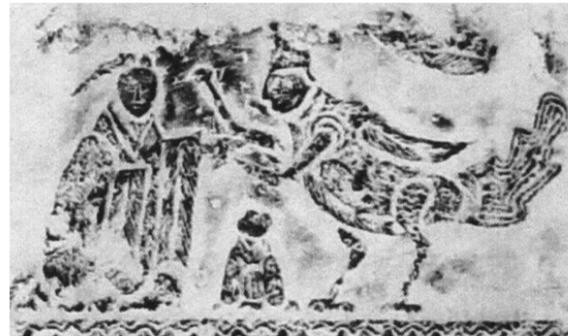


図1 扁鵲石針治療図

山東省微山県から出土した石刻像。鳥の姿をした扁鵲は紀元前5～4世紀に活躍したとされる伝説上の名医。『史記』に伝がある。

も記載されている。しかし薬物療法についてはほとんど触れられていない。

薬物の知識は、すでに先秦時代から集積され、漢代にはいくつかの形にまとめられていた。のちに梁の陶弘景が編纂した『神農本草経』の原型は、すでに後漢時代に存在したものと考えられ、その後の薬物知識は、この書の記載を基準として発展した。この書は個々の薬物についての記載が主になっており、具体的な処方については触れていない。

しかしながらすでに古くからいくつかの薬物を組み合わせる考え方は存在していた。紀元前168年ころの墓と伝えられている馬王堆漢墓(三号墓)から書名不明の処方集(便宜上『五十二病方』と呼ばれる)が

発掘されている。そして後漢の末には、処方学の一つの完成した形として、『傷寒論』がその姿を現してくる。

### 『傷寒論』の成立

『傷寒論』は原名を『傷寒雑病論』といい、もとは急性熱病を取り扱った傷寒部門と雑病を取り扱った雑病部門から成り立ち、のちに雑病部門は『金匱要略』として独立したというのが通説である。しかしこの両書は、別々に成立したもので、その書誌に関しては現在も研究が行われている(コラム参照)。『傷寒論』の著者とされる張仲景は、正史に記載がなく、その伝記も定かでないが、伝えられるところによると、後漢末期の人で、長沙の太守にまでなったという。10年足らずの間に、もともと200人余りいた親族の3分の2が死亡し、しかもそのうちの70%までが傷寒(当時流行していた急性熱病)で亡くなったことがきっかけで、多くの書物を読んで処方を集め、『傷寒雑病論』を作ったという。この書は、作られてすぐに散佚し、西晋の王叔和の手によって再び形が整えられたがまた散佚し、宋朝の校正復刻事業によってようやく定まった形(『宋板傷寒論』と呼ばれる)となった。

元来、『傷寒論』は傷寒という急性熱病について、その発症から経過を追って逐一その治療法を述べたもの



図2 清明上河図(故宮博物院収蔵)

宋(北宋)の首都・開封の市民生活を描いた絵巻。これはその一部で、看板に「趙太丞家」とあるのが医者兼薬屋。店頭で医師が子供の診療をしている様子が描かれている。当時の一般的な風俗である。両側の看板には「大理中丸・滯腸胃丸」「趙太丞統理男婦兒科」などの字が見える。

『清明上河図(乙種)』  
人民美術出版社より転載

ではあるが、その中には疾病の法則・診断法と治療原則およびそれにもとづいた薬物と処方の使用方法など、後世の漢方医学の基本的な内容がすべて備わっている。

### 隋・唐の医学

さらに時代が移り、漢が減び六朝時代になって、多くの経験の集積から新しい処方が創り出され、いくつかの書物に収録された。それらの書物はすでに滅びてしまっていたが、その内容は唐代の書物に見ることができる。六朝に引き続いて出現した隋では、皇帝の勅命により、巢元方が中心となって『諸病源候論』が作られた。この書は、およそ1,700条の症候とその原因を当時の病理観で解説した本で、各論の形を取った病理学書としては最も初期のものに属する。唐代の『千金方』や『外台秘要』は、多くの条文をこの中から引き、多くの処方を六朝時代の書物から引用して医学全書の体裁を作り上げている。これらの書物の中で用いられている論理は、陰陽五行説が基本になってはいるが、さらに各種民間療法や呪術など種々雑多なものが混ざり込んでいる。

その当時、唐には厚生省に相当する太医署(624年設立)という役所があり、そこでは定められたカリキュラムのもとに医学教育が行われていた。